
大人のための異文童話集10 アリとキリギリス

天野久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人のための異文童話集10 アリとキリギリス

【NZコード】

N1515M

【作者名】

天野久遠

【あらすじ】

それはいつの頃でしょうか…他愛無くお話をしても、楽しそうに音楽を奏でて、アリの姿をそつと見ているだけのキリギリスと、そんなキリギリスの残した音楽を心に奏でながら、自分の一生懸命な姿を見せたくて働いていたアリのお話です。

またいつものように、キリギリスがアリに向かってお話をしています。

「キミはいつもでもこうすることをして、朝から晩まで一生懸命に働いてるんだね。」

「そんなに一生懸命に働いて乐しいのかい？」

「それにしても、キミが乐しこと感ひひとつも働いてなのかな？」

「ボクは毎日が楽しくて仕方がないんだよ。」

「ボクはいつもポカポカとお口を開けながら、好きな時に寝て好きな時に起きる。」

「そうして田代めると音楽を奏でているだけでいい。」

「まあ、それ代に好きなこと樂しことが違うのだからね。」

「ボクは毎日好きな時に音楽を奏でて、キミは毎日朝から晩まで一生懸命働いて。」

「でも、それでいいんだろ？ わ。」

「やつてゐこどが樂しこと思つない、やつとそれでいいんだよ。」

いつでもキリギリスはアリの姿を見つけると、楽器を弾きながらその脇のです。

初めのうち“そんなくだらない”ことをして”と、アリはキリギリスのコトバには決して耳を貸すこもなく、黙々と働いていました。

そしてある日のこと…

アリは働き過ぎて病気になってしまいました。

そんなことになつているとは露とも知らないキリギリスは、毎日休みなく働いていたアリが、今日は一度も姿を見せないので心配していました。

最近ではアリも、働きながらキリギリスの話を聞いてくれていますから、いつしかキリギリスは音楽を奏でるよりも、一生懸命に働くアリの姿を見ながらお話することの方が嬉しくて楽しくて、何ともいえない気持ちでいたのです。

そしてアリが病気になつたことを知ったキリギリスは、急いでアリのところへお見舞いにきました。

アリのお家の人はみんな仕事に出掛けっていて誰もいません。アリは何も出来なくて寂しくしてました。

そんな時にキリギリスのお見舞いです。
アリはとっても喜んで、いつも以上にキリギリスのお話を聞きました。

キリギリスも、思ったよりアリが元気そうなので安心しました。

ギリギリスは毎日アリのお見舞いにきました。

それからというもの、アリはキリギリスが来ることを待ち望むようになりました。

キリギリスはお見舞いに来ると、音楽を奏でながら、たわいのない

お話をしてもう1回します。

アリはその音楽とお話しで心が暖かくなり樂しくなります。

そんなことが数日続き、アリの病気はもうすっかりよくなりました。キリギリスもまた、一生懸命に働くアリの姿を見ると喜びました。

病気を明けて働きはじめたアリは、以前とは少し違つて、キリギリスの音楽やお話しを楽しみに、働くようになつていきました。

こうして日々が過ぎるうちに、春から夏、夏から秋とへと季節は変わり、寒い冬がもう近くまでやって来ていました。

そしていつしかアリは、キリギリスの価値観を認めてるようになりました。

とうとう寒い冬がやって來ました。

アリはそれまでに一生懸命に蓄えた食物で不自由はありません。

しかし、それまで毎日のように好きなアリの姿を見ながら、音楽を奏でてお話をしても暮らしていたキリギリスは、冬への貯えなど何もしていなく、寒い毎日をひもじく暮らしています。

そんな姿を見兼ねたアリは、家族に相談して、キリギリスを家に置いてあげたいと話します。

しかしそれを聞いたアリの家族は

「毎日好きなことばかりして遊んでいたのだから、自業自得だ。」

と言つて、まったく取り合つてはくれませんでした。

仕方なくアリは、自分の集めた食物の中から少しだけ、ひとつそりと

キリギリスに届けては、お話を音楽を聞きました。

そんなことを続けていたところ、とうとう本格的な寒い冬がやつてきました。

アリは振り積もった雪で外へも出られなくなりました。

どうして誰も、キリギリスのことを分かつてあげないのだろう?
なぜかアリの心は痛んでいます。

アリは自分が病氣の時、キリギリスが奏でてくれた音楽やお話を、
何も出来なく寂しかった自分の心を、優しく暖めてくれたことを知
っています。

その時からアリは、世の中には働いて食料を貯えること以外にも、
それぞれに違つた価値観で、違つた役立ち方があると知りました。
それでもやはり、食べていかないと生きていけません。

今頃…キリギリスは、どうしているのだらう。

アリは外を眺めては毎日そう考えます。

あれは、本格的な寒い冬になる前のある日のことでした。
アリがこれからることをキリギリスに尋ねると、キリギリスは笑つ
て答えました。

「ボクの音楽は好きだからやつてるだけだよ。」

「だからボクはボクの価値観に従い、キミはキミの価値観に従えば
いい。」

「価値観なんてそれぞれ違つていいのだから、選んだ違いで生じる
結果は気にしてはいけないよ。」

その時アリには、キリギリスの言つてることが理解出来ませんでし

た。

ただ、そつキリギリスが答えるのを聞いて、アリは何故だか胸の奥が熱くなつて田の前がぼやけていました。

きつとキリギリスさんは食べることよりも最後まで、音楽を奏でることを選ぶのだろう。

もうすぐ側にはいなくなる気がする。

アリがそう思った時、心に寂しさを、瞳に涙を浮んでいたのでした。外に出られないくらい、たくさん雪が降り積もつてからも、暫くは、遠くの方でキリギリスの奏でる音楽が聞こえていました。

キリギリスは雪の降り積もる寒い冬でも、アリに聞こえるようにと、音楽を奏でていたのです。

アリはそんな音楽を耳にしては、何度も家族に頼みました。何度も自分の食料だけでもを持つて、家を出ようと試みました。

そのうちに、雪深い外からは音楽も聞こえなくなっていました。

そして寒い冬は去りました。

しかし、もうどこにもキリギリスの姿はありませんでした。

それでもアリは、毎日キリギリスを探し続けました。

なぜなら…

耳には聞こえなくとも、アリの中には、いつまでもキリギリスが奏でてくれた、あの音楽が聞こえていたからです。

「ボクはキミが一生懸命働く姿が大好きで、それだけを見て暮らしたいんだ。」

そしてアリは、いまでも毎日黙々と働きながら、キリギリスが言ってくれたこのコトバを思い出すのでした。

それはいつの頃でしょうか..

他愛無くお話しをしては、楽しそうに音楽を奏でて、アリの姿をそつと見てころだけのキリギリスがいました。

そんなキリギリスの残した音楽を心に奏でながら、自分の一生懸命な姿を見せたくて働いていたアリがいました。

(後書き)

BGMには鬼束ちひるを“私とワルツを”を聴いて欲しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1515m/>

大人ための異文童話集10 アリとキリギリス

2010年10月20日18時33分発行